

ドイツ館や周辺で板東俘虜収容所開所 100 周年の多彩なイベント

第一次世界大戦時、松山と丸亀、徳島にあった捕虜収容所がまとめられ板東俘虜収容所が開所して 100 周年になる 4 月 9 日と前日の 8 日にドイツ館および周辺でさまざまなイベントが開催され、県内外、海外からも大勢の方が訪れ注目を集めました。

収容所跡地で記念式典

桜や桃の花が満開の収容所跡地で 9 日、飯泉徳島県知事や大阪・神戸ドイツ総領事館のヴェルナー・ケーラー総領事、泉鳴門市長ら約 100 人が出席し記念式典が開催されました。式典ではヴェルナー総領事が「このように祝うことができる収容所はあまりありません。板東から戦争に反対し平和を推進する運動がおきればよいです」とあいさつ。このあと参加者たちは、鳴門市内外の子どもたちでつくる合唱団「うたの広場 NKB」が第九の「歓喜の歌」を響かせるなか、収容期間に亡くなった捕虜たちの慰霊碑に花をたむけていきました。



桜や桃が満開の収容所跡地で開催の記念式典

このあと参加者たちは、収容所内史跡を巡る解説に耳を傾け、当時の捕虜たちの生活に思いをはせていました。

ドイツ館で記念コンサート

ドイツ館では 4 月 9 日、板東俘虜収容所開所 100 周年記念コンサートが開催されました。まず、板東俘虜収容所の捕

虜のパウル・エンゲルたちと地元の人たちとの交流の歴史を伝えることを目的に、徳島市内を拠点に活動している徳島エンゲル楽団が、収容所開所時に演奏されたタイケ作曲の行進曲「旧友」を披露したあと、「第九」の演奏にあわせ鳴門「第九」を歌う会と徳島エンゲル合唱団が「歓喜の歌」を合唱しました。また、板東の人たちが作詞作曲して日独のコスモス交流の起源や様子を紹介した曲目「友愛の花」を演奏、客席と一緒に合唱しました。



徳島エンゲル楽団演奏で「第九」合唱

合間にはドイツ兵捕虜のヘルマン・ハーケがお母さんに宛て第九の練習状況などを書いた手紙の朗読がおこなわれるなど、参加者一同、板東俘虜収容所時代を改めて振り返っていました。

「百年の軌跡」企画展

ドイツ館二階企画展示室では、4 月 1 日から 30 日の 1 ヶ月間、『板東俘虜収容所』開所 100 周年企画展—記録資料と振り返る百年の軌跡—と題し、企画展を開催しました。こ



収容所開所 100 年の軌跡を振り返る企画展

の歴史を振り返り、現代に生きる私たちが後世の人々に残せるもの、伝えなくてはいけないものを共に考える機会となることを趣旨とし、収容所開設から、収容所の運営や生活の様子、閉所後の交流の復活やその深まり等、100 年の軌跡についてパネル 19 枚で紹介しました。また実物資料として『板野郡誌』や『旧板東町行政文書』、元ドイツ人捕虜が記した O.A.G. (ドイツ文化研究協会) の研究書等を展示しました。

収容所の商店街タパウタウ再現や バルトの庭も開園

ドイツ村公園では第一次世界大戦時に中国の青島にあった中国人商店街タパウタウの再現として飲食や雑貨など 30 店

のブースが構えられるとともに、フラダンスやカラオケなどの難民支援のステージやコンサートが開かれました。また、同公園内の捕虜慰霊碑や「ばんどうの鐘」、捕虜が建設したドイツ橋を回るウォーキングが開催されたほか、映画「バルトの楽園」の撮影に使用されたロケセットで当時の収容所を再現したロケ村「バルトの庭」も限定開園し、当時、捕虜たちが展覧会のために作ったケーキの家が再現されたほか、ドイツ製の木のおもちゃやクイズラリー、捕虜たちも楽しんだボウリングや射的遊びも提供されました。

訪れた子どもたちや家族連れはこの地で 100 年前に始まった日独交流の歴史を振り返ったり、当時の遊びを体験したりしていました。



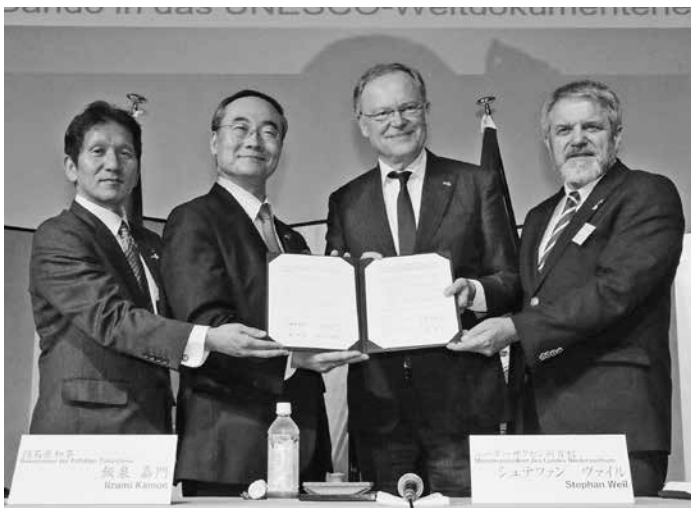
ドイツ兵捕虜が楽しんだボウリングを体験

板東俘虜収容所資料のユネスコ「世界の記憶」登録 独ニーダー州、リュ市、県、鳴門市が共同申請向け調印

第一次世界大戦時のドイツ人捕虜との交流やアジア初演となる「第九」全楽章演奏のプログラムなど「板東俘虜収容所関係資料」のユネスコ「世界の記憶」登録申請にあたり 5 月 27 日、徳島市内のホテルで共同申請者の代表となるドイツニーダーザクセン州のヴァイル首相、リュネブルク市のメ

ドケ市長、徳島県の飯泉知事、泉鳴門市長が共同申請に向けた協定書に調印を行いました。

最初に飯泉知事が「収容所での奇跡の交流を世界に発信し、世界平和に貢献する絶好の機会が訪れました」と意義を強調したあと、ヴァイル首相が「いま世界では緊張した状態がありますが、100 年前の板東では敵同士が次第に交流し、理解・交流へと発展していきました。このような事例は他にはありません。日本側と協力し共同申請し成功させたいです」と抱負を語っていました。続いてメドケ市長が「鳴門との友好関係は板東俘虜収容所が基礎で、中でも捕虜たちが演奏した第九は私たちの絆になっています。姉妹都市交流は平和なものであり、一緒になって世界の平和に向けて共同申請をやっていこうと思っています」とあいさつ。最後に泉市長が「4 者が共に力を合わせ登録が実現するように、また、お互いの文化や教育、観光の振興につなげていくことができるよう願っています」と述べました。4 者はこのあと協定書に署名、手に持ってがっちり握手を交わしていました。



調印書を手にする左から

泉市長、飯泉知事、ヴァイル州首相、メドケ市長

この共同申請は 2 国以上の申請形態になることから、国内委員会を経ることなくユネスコに直接申請することになりま

す。4者は平成30年に申請できるように協調して作業に取り組むことにしています。平成31年にはユネスコで採択の是非が決定されることとなります。

所蔵品紹介 『三つの童話』

板東俘虜収容所では捕虜により多くの書籍が出版されましたが、その中で異彩を放つのが今回紹介する『三つの童話』です。特に次の点が注目されます。

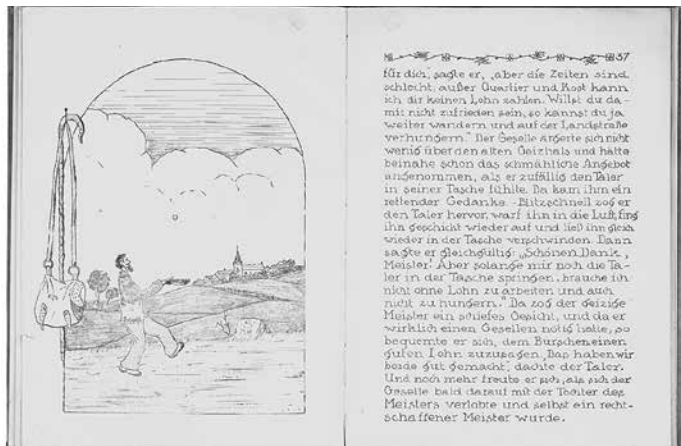
物語は、一般市民のドイツ人が書下ろしたもの

初版と第二版とがある

全部で1600部も発行している

売上げ益は収容所仲間のために使われた

出版と発行・販売について、かなりの詳細が判明している



初版の挿絵と本文

本書はタイトルどおり3つの童話（「塹壕のハンス・ヴンダーリヒ」「幸せの銀貨」「話すナイチンゲール（小夜啼鳥）」）から構成され、本文77ページ、カラー挿絵8葉となっています。内容についての紹介はここではしませんが、板東研究の先駆者である故富田弘豊橋技術科学大学教授がかつて和訳して出版されています（『三つの童話』徳島出版、1984）。残念ながらこの本は、出版元が廃業していますので今では入手は困難ですが。

装丁と板刻（謄写版原紙へのガリ切り）は板東収容所印刷所の中心人物のひとりのグスタフ・メラーで、収容所新聞『ディ・バラック』の編集スタッフであり、コンサートプログラムなど数多くの板東印刷物の意匠・印刷を手がけている人でもあります。装丁は布装で、表紙の見開き両ページにトカゲとキノコの絵を散りばめるなど凝ったデザインになっています。第二版は改めて最初からガリ切りをしながらしているので、本文の配置は初版とは異なっています。さらにカラー挿絵は構図が異なり、また初版が線画であるのに対し、ベタ塗りも用いるなどかなり違いがあります。

この本について言及している当時の資料は、日本側では『雑書編冊』（徳島県文書館蔵、以下雑書）とドイツ側では『日

刊電報通信』（ドイツ日本研究所蔵、略称TTB）です。前者は収容所の門外にあった警備警察官出張所の報告であり、後者は捕虜が板東で発行していた日刊紙です。雑書では1917年10月16日の報告に、



第二版の挿絵と本文

「エルnst、ベヤ」ガ伽話ヲ作り之レヲ印刷ニ付シ各俘虜ニ販売ナシ之レカ売上代金ヲ以テ日本各地ノ収容所ノ俘虜ヲ救助ヲ為スノ計畫ノ相談ヲ為シ

とあります。「エルnst、ベヤ」とは神戸在住の商社員エルnst・ベアのごことで、友人の慰問に訪れていたのです。一方、同日付のTTBには次のような広告が掲載されています。

神戸のE.ベア氏から収容所印刷所に、彼の書いた3つの童話の印刷を委託されました。本は12月初めにできあがります。およそ90ページ、明瞭な子供に読みやすい活字体で約10枚のカラーの挿絵つきで、耐久性のある上品な布装となっています。著者はこの本を収容所で販売することを了承されましたので、戦友諸氏には知人友人にクリスマスの楽しみを与える良い機会が得られます。とりわけ児童書が極東ではほとんど入手できなくなっているだけに、なおさらでしょう。さらにはこの本は、捕虜収容所で印刷、挿画、製本されている点で特別な価値があることは疑いありません。（...）出版部数をできるだけ正確につかみたいので—増刷は不可能なのです—注文を今日班ごとに渡されるリストに記入するか印刷所にてお願いします。（...）売上げ益が生じた場合は、著者から私達の収容所のためにお使いいただくことになっています。

双方ともこの本の出版の発端を記しているようで、いくつか違いがあります。雑書ではその当日に出版への初めての相談があったかに見えます。しかしTTBにはこの本のページ数や装丁、発行時期など、なにがしか事前の打ち合せがなければあり得ないことが書かれています。また雑書では収益を日本各地の収容所のために使うとありますが、TTBでは板東収容所のためとされています。雑書では警察官が収容所職員から聞取った話を書いていますので、そこに聞き間違いや勘違いが入っているかもしれません。（川上）

ドイツ兵捕虜がはじめて板東に来た道筋

百年前の第一次世界大戦時、鳴門市大麻町（当時は徳島県板野郡板東町）に板東俘虜収容所がありました。ここには中国青島で日独戦争後捕虜となったドイツ兵約千人ほどが収容されていましたが、日本に送られて来た当初から暮していた場所ではなく、およそ2年4ヵ月後新設されて、それまで四国内の3ヵ所にいた人たちが移ってきたのです。ここは徳島市内から20km足らずの場所ですが、当時の貧弱な交通事情から特別の人をのぞき鉄道を使わず、ずっと徒歩で移動してきました。

今年になって、彼らの移動してきた行程を追体験しようという企画が持ち上がり、今年5月末ドイツ館の二人が、ひとまず徳島俘虜収容所跡となる徳島県庁駐車場から板東俘虜収容所跡まで歩いてみました。その道筋については、陸軍文書中の『徳島俘虜収容所業務報告』に「六日午前八時二十分出発淡路街道ヨリ撫養（ルビ：むや）街道二出テ板東二向ヒ午後一時無事二板東収容所ニ…」と概略が書かれています。幸いなことに当時の地図として、徳島市街図と2万5千分の1の地形図が参照できますので、この地図上で彼らの道筋を考察、現在の地図に照合して私達の道程を決めました。その結果判明したのは、現在の吉野川（当時は別宮川といった）を渡る個所をのぞいて、当時の行程を大きく逸脱せずに歩けることでした。問題の個所は、当時古川橋という貧弱な木橋で、それは昭和に入って少し離れた下流側に吉野川橋という近代的な橋に取って代わられます。これともう1ヵ所、今切川を渡るところで少しだけ迂回することになります。これをのぞくと当時の道路がそのままにあり、拡幅もされずに残っている部分が多いというのが、実際に歩いてみた時の印象です。

徳島以外の丸亀・松山両収容所の人たちは、徳島市内からさらに南の小松島港からとなり、さらに10km以上移動距離が増えます。こちらの行程の詳細については文書に残されていないため、推定するほかありませんが徳島市内からは上記とほぼ同じと考えられます。小松島から徳島までは可能性として二つあるのですが、企画展示では当時の幹線道路である

土佐浜街道に抜ける道程を採用しました。こちらにも実際に歩く案はあったのですが、夏の暑い時期に入ることと、多くの個所で交通量が多い割に道幅が狭く、歩行に危険を感じる所があるため断念し、自動車を使って調査しました。こちらは旧街道がそのまま拡幅されている部分の多いことが徳島以降と異なる点です。

踏査での印象ですが、さすがに百年前の当時そのままの景観は都市部や住宅密集地ではあり得ないものの、農村部や古い建築物の残る個所では、ひよっとするとドイツ兵の見た風景とさほど違わなかったかとも思われました。移転のとき、私達のように身一つではなく、寝具や身の回りのもの一切を満載した大八車を今のようなアスファルト舗装もない地道を引っ張って行くのですから、たとえ交替交代であったにしても大変な思いをしたのではないかと想像します。

以上のような当時の文書や写真の調査そして実際の踏査をふまえ、当館で9月1日から10月1日まで企画展示「ドイツ兵、板東に至る — 百年前、ドイツ兵捕虜たちが板東に来た道を辿る」を行いました。（川上）



大八車を引いて板東に到着



古川橋を渡るドイツ兵捕虜

編集後記

今年度からルーエの発行は、ドイツ館史料研究会から鳴門市に変更されたのに伴い、編集も同研究会の川上三郎氏からドイツ館職員が行うことになりました。内容もこれまでドイツ館所蔵資料の紹介を中心としたものから、ドイツ館に関連する事業やイベント等も含めた紙面構成に変更しました。

今回は川上先生にドイツ人捕虜のことやドイツ館所蔵資料を紹介していただきました。このほか板東俘虜収容所開所100周年記念事業の紹介や、同収容所資料のユネスコ「世界の記憶」登録に関する共同申請に向けた調印を取り上げました。ご一読ください。